

再現屋、産声を上げる V

61 隙間

お文さんの「泊まっていきはつたらどない」という誘いを、志乃はお母さんが寂しがるところと丁重に断って、帰っていった。

駅まで見送り、屋敷まで戻ってくると、ちょうどじいちゃんの車が玄関に乗り入れようとしているところだった。

じいちゃんはまさに疲労困憊といった体で、志乃が来てたよと話しかけても、そうかとわずかに頷いた^{うなず}ただけだった。

じいちゃんを救わなければ！

そのためには二つの謎を解かねばならない。志乃が考えた作戦がうまくいくかどうか。すべてはそれにかかっている。一世一代の大博打だ。表現が古くさいが……。

「おはようさーん」

翌朝午前九時。明るい声と共に志乃はやってきた。じいちゃんは今日も入れ違いにお出かけた。

本日の志乃の服装はワイルド感溢れるツナギだ。オレは遅くまでシナリオと格闘していたので、いささか寝不

足な顔で彼女を迎えた。

志乃は、演じるための参考になりそうなシーンに目星が付いたら、何度も繰り返し観て、体にはあちゃんを染みこませると言う。そうなれば、オレまで志乃に付き合ってフィルムを観続ける必要はないわけだ。

二日目は昼過ぎまでかけて、どうにか参考になりそうなフィルムを十本に絞った。

「トシ、しばらく一人にさしてくれる？ 集中してみたねん」

それはこちらにとっても好都合だ。例のハイビジョンビデオカメラを担いで、オレは庭に出た。

再現するのが「作戦」だけじゃもったいない。三周忌ビデオのボーナス用の再現映像も撮れたら一石二鳥である。オレはカメラで庭のあちこちをロケハンして廻ることにした。

撮影には、ただカメラの位置や向きを決めればいいというもんじゃない。たとえば時間によって太陽の向きが違うわけだから、適当なショットを押さえるためには時間帯を変えて何度も試し撮りする必要がある。

今日のところは、子供の目線で撮ってみようか。そう決めて、オレはローポジション主体にテープを回していった。

池を周回し、樹木の間を分け入って築山に登る。オ

レはいつの間にか、ばあちゃんを撮影するということをすっかり忘れて楽しんでた。オレ自身が子供に戻った気分でいたのだ。いかんいかん。

蔵の近くに辿り着いたところで、お文さんの話を思い出した。ばあちゃんはいいちゃんが学校から帰ってくるのを、この辺りでひとり本を読みながら待っていたという。色白だったばあちゃんのことだ、夕方でも陽差しの強い日など、影を求めて彷徨^{さまよ}ったりしたことだろう。

蔵の東側、隣家との間の壁と蔵の間に僅^{わず}かながら隙間^{すきま}がある。大人ひとりがやつと通れるぐらいだが、子供にとっては十分な通路だ。北へと真っ直ぐに続いている。ここなら午後の陽差しを避けることができるし、風通しもいいので、想い人をひっそり待つには好条件だ。

オレはカメラを録画モードにして、蔵と壁の間へと入っていった。どこかにはあちゃんの痕跡がないかと目を皿のようにしてファインダーを覗きながら。

通路は蔵の奥行き分を歩いただけで、竹藪に遮られて終点となった。残念ながら何も発見することはできなかった。まあそんな都合のいい話はないか。

オレは体を反転させ、来た方向に戻ろうとした。そのときファインダーを流れた映像に、オレは奇妙な違和感を感じた。

それは一瞬のことだった。

オレは恐る恐る、目を上げた。

62 発見

蔦^{つた}に覆われた蔵の白壁が、目と鼻の先にそそり立っている。土台部分には、大小異なる大きさの石が隙間なく詰め込まれており、南北に延びる石垣の帯を作っている。息の詰まるほどの緊張感が、あたりに漂う。

突然、背後でギャーツと声がした。オレは心臓が口から飛び出そうなほど驚いて振り向いた。目の前を一匹の黒猫が悠然と築地塀^{つじべい}の上を横切っていく。まるでオレのビクつく心を見透かすように。

この築地塀は屋敷ができた江戸時代に作られたもので、すでにあちこちが崩れ、綻びている。人目を避けられるほど高くもない。だから子供時代のばあちゃんやじいちゃんが乗り越えたり、壁の上に座って話したりすることができたのだという。

猫の姿が築地塀に垂れ下がる梅の枝の陰に消えたのを見届けると、オレは心臓の動悸が落ち着くのを待って、再び蔵の方に体を向けた。

さつきファインダーを透して見た映像の中に、オレが“？”と感じたものが、確かにあった。それは夕暮れ時の空を滑空する鳥のごとく、一瞬のうちに視界を横切っ

た。だから何だったのか正体を掴むどころか、動物やら虫やら、それ以外なのやら、見分けることすらできなかった。

いや、動物でも昆虫でもない。それは感覚に訴えかけてきた、なにがしかの“違和感”だった。

オレの胸は意味もなくざわめいた。この違和感を見過ぎて帰ってはいけない、そんな思いが頭の中を去来する。まるで志乃が言いそうなことだ。猫を見たせいかもしれない。

ビデオカメラを傍らの草むらに置き、両頬を手でパンパンと叩いて気合いを入れてみる。よし、違和感でも伊予柑でも何でも来いだ。オレはよっこらせとしゃがみ込むと、潜望鏡で海上を伺う潜水艦のように、息を潜めて周囲を観察した。

静かだ。動くものといえば、蔦の葉が春のそよ風に靡いているぐらいのものだ。それでも諦めずに執念深く顔を上下左右に動かす。

これは……？

オレの心を弾くものを見つけた。しかしどう理解すればいいのだろうか。

白壁に貼り付くように密生する蔦が、その辺りだけ、他よりも密集する度合いが低いように感じられるのだ。

さらに観察していくと、原因は蔦の根元にあることに

気づいた。ずいぶん前に一度、蔦が壁から剥がされたところがあるようだ。そしてそれは、蔵に凭れるように置かれた、一個の石が動いたためであることをようやく発見した。

石の大きさは二、三歳の子供が屈んだほどの大きさだ。とりたてて他の石と異なる特徴はない。

オレは石に指を掛けて引っ張ってみた。するとどうだ、動いたぞ、石がまるで扉のように左奥を中心に回転したのだ。そして石がどいた奥に、白壁を穿って作られたトンネルが現れた。

あまりの展開に、全身が総毛立った。

これは誰が見ても、隠しトンネルだ。

なぜこんなところに。

考えていても答えは得られない。オレはひとまず中に入ってみることにした。

トンネルは暗く、腹這いにならないと入れないほど狭い。携帯電話の液晶画面を、懐中電灯代わりに照らして、オレは前に進んだ。

中は意外にも綺麗で、落ちている石ころで手足を擦りむく心配はなかった。扉代わりの石がそれだけきちんと作られ、トンネルを密閉していたことの証だ。

五、六メートルも進むとトンネルは行き止まりになっていた。しかし終点には立ち上がれるだけの空間があり、

土壁には梯子はしごが設けられていた。

オレは梯子を昇り、天井を塞いでいる木製の蓋らしきものを押し上げた。

どうやらここがゴールのようだ。かすかな光の中に、小さな部屋が浮かび上がった。

63 暗闇の恐怖

この小さく暗い部屋は、察するところ、物置の用途として使われているようだ。細い隙間から差し込む弱い光が、整然と積まれた段ボールや葛籠つづらの輪郭をなぞっている。

告白しよう。オレは恐がりだ。暗所恐怖症でも閉所恐怖症でもないが、墓場や廃屋といった薄気味悪い場所は苦手だ。もつとも得意な人間なんてそうはいないだろうが。

隠された通路を抜けて、秘密の部屋を発見した高揚感が薄れてくると、オレの中の恐怖心がだんだん鎌首をもたげてきた。重なった葛籠の中から今にも死者が蓋を開けて起きあがるんじゃないか、正体不明の生き物が足許をぞわぞわ通りすぎるんじゃないか、そんなことを考え始めたら、後はパニツクに向かって一直線だ。それは避けたい。

オレはやってきた通路に戻ろうとした。しかし、あわてたせいで足許がもつれ、積み重なっていた段ボールの中に倒れてしまった。ホコリがもうもうと舞い、鼻孔をくすぐる。おまけに何やらふわふわしたものがオレに襲いかかってきた。

「うわわ、ファックショイ！ あわわわ」

絶叫とクシャミが交錯し、得体の知れない恐怖に我を忘れた。

「たす、たす、助けてくれー」

暴れれば暴れるほど、ふわふわとした怪物は絡み付いてくる。オレは手足をばたつかせ、ますます混乱の度合いを深めていく。

そのとき、思わぬ声が壁の外から聞こえてきた。

「誰、そこにおるの、もしかしてトシ？」

志乃だ。救いの神だ。女神さまだ。

「オレだ、オレだ」

「アハハハハ。何それ、オレオレ詐欺？」

「ふざけてないで助けてくれ！」

「そない言われても。鍵もないのに、どうやって入ったんよ？」

「秘密の通路があつたんだ」

「ゲッ。そんならレシピ隠した意味ないやん」

「レシピ？」

暗がりの向こうから、志乃がペタペタと壁を叩く音が聞こえてくる。

「え、ここ、レシピ置いたある部屋やろ？」

オレは頭から冷水をかけられたように、突然、自分を取り戻した。志乃の暢気な声が、冷静さを取り戻す役割を果たしたことも否定できない。

ここは、レシピ部屋か？

そう言えば、広さといい、天井の高さといい、外観と完全に一致する。

「トシ、トシ、大丈夫？」

志乃がペシペシ叩いているのは、おそらくあの頑丈そうな扉だ。

「ああ、もう大丈夫だ。それよりさ、どこかそのあたりに懐中電灯があつたろう？ それ持って蔵を出て、壁際の狭い路地まで来てくれ」

「わかったー」

オレはゆつくりと立ち上がった。絡みついた怪物の正体は、どうやら古着らしい。転けたはずみで携帯を落としてしまったが、運良く見つけることができた。再び液晶の明かりで足許を照らし、冷静に來た道を探して通路をぐぐり、入り口の路地まで戻ってきた。

志乃は、オレが石垣の間から出てきたのでビックリしたようだ。どうやって発見したん？ と聞かれて、ファ

インダー越しに観た蔦つたの様子がね、と説明すると素直に感心してくれた。悪い気はしない。

「アンタって、カメラ探偵やなあ」

「なんじゃそら」

「撮影してる時の注意力がスゴいってこと」
なるほど。

オレは志乃を連れ、再度、レシピ部屋の探検に出発した。今度は強力なライトがあるので心強い。

そして遂ついに『“天使のプディング”レシピ』と上書きされた箱を“発見”したのだ。

64 無と有

今度は懐中電灯があり、志乃もいたので、部屋の暗さにビビらないで済んだ。その代わり、堆うずたかく溜ほこりまった埃には閉口した。

レシピが納められてから約二年、わずかな隙間からでも埃は入ってくるものだ。この様子だと、封印前には扉は開いていたに違いない。

レシピの小箱は、部屋の中央に置かれた立派な葛籠の上に、ちよこなんと乗っていた。発見に要した時間は僅か十数秒。拍子抜けだ。まあ、嚴重に封印された部屋だから敢えて隠す必要もなかったんだろうけど。

逆にいえば、誰もあの隠し通路の存在を知らないということか。

志乃が小箱を持ち上げたので、ひとまず考えるのを中止した。彼女は小箱の蓋に手を掛けると、躊躇^{ためら}うことなく開いた。

「おい、慎重に、丁重に」

オレは手に持った懐中電灯で志乃の手元を照らした。光の輪の中で志乃の顔が小箱に近づいた。

次の瞬間、志乃は小箱をひっくり返した。オレはまるでこぼれ落ちる宝石を心配するように、あわてて手を差し出した。

ところが箱からは何も落ちてこなかったのだ。

「空っぽや」

「なに？ カラあ？」

志乃は、ほらと小箱の中が見えるようにこちらに向けた。

確かにカラである。箱の底が見えている。志乃に懐中電灯を持たせ、自分の手で確かめてみたが、特に二重底でもない。

箱の中にレシピは入っていないかった。

オレたちは声もなく顔を見合わせるばかりだった。やがて志乃は肩をすくめた。

「ひとまず出よつか。その箱、持っていく？ 置いと

く？」

オレはハア〜っと息を吐きながら元の葛籠の上に置くことで返事した。

もう何が何だか判らなくなってきたというのが正直な感想だ。次々に謎が現れて、一向に片付かない。前に進まない。イライラが募る^つ。そのせいだろう。注意力が散漫になっていたオレは、秘密の通路を降りる階段を踏み外した。角材を組み合わせた階段なんて日頃は縁がないから、上り下りしにくいつたらない。

「くそっ」

思わず拳骨で階段を殴ってしまった。階段は大きく揺れて、後から降りていた志乃が、キャツと叫んだ。志乃の持った懐中電灯の光も揺れる。

その光の中に白いものが見えた。幽霊^{たぐい}の類じゃない。何か四角いモノだ。

「し、志乃！」

「なによー、揺らさんにとってえや」

「違う、懐中電灯で階段の下を照らしてくれ」

彼女はぶつくさ言いながら、懐中電灯を動かした。すると光の輪の中に、一冊の小さな手帳が浮かび上がった。オレは手を伸ばして拾い上げ、そして愕然とした。まさかという衝撃と、やはりという確信が頭の中で渦を巻いた。

オレは志乃を促して秘密の通路を抜け、陽の光の下に出ると、立ち上がるのももどかしく、拾った手帳を開いた。

鉛筆による手書き文字が整然と並んでいる。ページの上部には書き込まれた日付だろう、何月何日と見出しのように書かれている。

志乃はオレの只ならない様子に眉を顰^{ひそ}めながら、横から手帳を覗き込むと、アツと叫んだ。

「おばあちゃんの字いやん！」

「そう、ばあちゃんの手帳だ。しかもお文さんが言っていた、行方の判らなかった最後の手帳だ」

「えー、そんなが、なんであそこに」

「……おそらく“天使のプディング”のレシピを封印した部屋から持ち出したのは、ばあちゃんだ。そうじゃないかと思ってた」

65 祖父の衝撃

志乃は、よく判らない、と首を傾げた。オレは手帳の最後の書き込みページを示した。

『三月三十日 曇り空 風強し』

たったこれだけ。他の日は天気を記した後、その日にあったこと、思いついた句想などが書き込まれていると

いうのに。

なぜならその日が、ばあちゃんの亡くなった日だから。この一行が、ばあちゃん最後の書なのだ。

「とにかく、じいちゃんに報告しないとイケないな。

シヨツクなことだけど」

「そうやね」

オレは蔵の側壁と平行に走る築地塀を眺めた。さつき見た猫の姿はどこにもなかった。

今夕は、帰省してから初めて妹夫婦と会う約束があるというので、志乃はじいちゃんの反応を気にしながらも、しぶしぶ帰っていった。

じいちゃんは陽がとっぷり暮れてから帰宅した。オレはじいちゃんが夕食を済ませた頃を見計らって、話を切りだした。

じいちゃんは腰を抜かささんばかりに驚いた。お文さんもじいちゃんが手にした手帳を覗き込むと「あれま」と叫んだきり絶句した。多々良さんも隣で口を開けたままフリーズしている。

「し、忍がレシピを……」

じいちゃんの双眸そうぼうが虚空を泳いだ。しかし次の瞬間、すつくと立ち上がると、

「多々良！ 付いてこい！」

一声高く叫び着物の裾を翻すと、座布団を蹴って立ち上がった。そして廊下の障子を壊さんばかりに強く引き開け、裸足のまま庭に飛び降りた。

「旦那様、お待ちを！ 文、懷中電灯だ」

「は、はいよ！」

じいちゃんは蔵を目指して一目散に駆けていく。七十歳の老人のどこにそんなパワーがと思うくらい、もの凄いスピードで駆けていく。

その後を、懷中電灯とじいちゃんの草履を持った多々良さんが追いかける。お文さんも駆ける。オレは電池式のランタンがあつたのを思い出し、玄關脇の物置から持ち出すと、遅れて三人の後を追った。

蔵の前では、じいちゃんが「どこだ、どこだ」と腕を振りながら喚わめいていた。

「おいこら、俊郎。隠し扉はどこじゃ？ 早よ教えんかい」

苛立つ顔がオレを見据える。どうやら秘密の通路のことは本当に知らなかったようだ。

オレが石の扉を開くと「誰がこんなものを」というじいちゃんの呟つぶやきが聞こえた。

あわてて飛び込もうとするじいちゃんを抑え、まずはオレが先導して中に入った。

「ここから階段だからね。気をつけてよ」

「うるさい！ 年寄り扱いするな」

オレは尻を叩かれながら、レシピ部屋に入った。後からじいちゃんと多々良さんが続く。

持ってきたランタンのスイッチを入れ、傍らの筆筒たんすの上に置くと、部屋が煌々こうこうと照り返った。

「旦那様、これを」

多々良さんが中央の葛籠を指さす。じいちゃんがその上に乗っている小箱に震える手を伸ばし、蓋を開けた。もちろんレシピは入っていない。

じいちゃんは小箱を掴んだまま、あらぬ方向を見上げた。

「なんでや……なんでここにあらへんのや……俊郎、本当に忍が持ち出したのか？」

「残念だけど、そう考えるのが妥当だと思う。あの通路を通って。たぶんそれが体力的に無理を強いたんだろうね。ばあちゃんの心臓に……」

「バカな……」

じいちゃんは床にへたりこんだ。しかしすぐ頭を上げると、重要なことを思い出したという顔付きでオレに迫ってきた。

「しかし忍はレシピなぞ持つとらんかったぞ」

「そうだよね、亡くなったばあちゃんがレシピを持っていたら、その時点でこの部屋の意味は無くなってたろう。調査されて秘密の通路が発見されていた可能性もある」

「そりゃそうじゃ」

「でもそうはならなかった。誰もレシピが消えたなんて思いもしなかった。なのに実際には消えており、ばあちゃんの手帳がこの梯子はしごの下に落ちていた。最後の書き込みは亡くなった当日だ。従って、レシピを持ち出したのは、ばあちゃん以外、考えられない」

オレは予想しうる質問を先回りする形で、説明を続けていった。

「それでも持ってなかったんじゃ。見つかった時は手ぶらだったんじゃ」

「じいちゃん」

オレは居住まいを正した。

「ここから先はオレの想像だよ。ばあちゃんはレシピを飲み込んだんじゃないかな」

「飲み込んだ……？」

多々良さんがまさかと言いたげに復誦した。

「うん。狭い通路を四つん這いになって往復するのは、ばあちゃんにとって、かなりの重労働だったと思う。それほどの覚悟で事に臨んだのに、池のそばまで戻ってき

た時、心臓の発作に襲われ倒れてしまった。まるで動けない。このまま誰かに見つければ、レシピを盗んだことがバレる。いや、バレるのは構わない。それよりもレシピをこの世から抹消する当初の計画が潰^{つぶ}えてしまう」

「抹消……」

「要するに、焼くなり破り捨てるなりして消してしまおうという」

「な、なぜ忍がそんなことをせにやならん？」

「まだ判らない？」

オレは腰に手を当てると、心を鬼にして、じいちゃんを正面から睨^ねめ据えた。

「優しいばあちゃんは、子供たちと自分の夫が角突^つき合わせて争う姿に心を痛めていた。『天使のプディング』を間に挟^のんで、親子が口汚く罵^のり合うのを見るに耐えなかったんだ。そんな、家族を不幸にするようなものなら無くなってしまう、この世から消えてしまえ！ 具合が悪くして、伏した床の中でそんなことを考えても不思議はないだろう？ もちろん、紙に書いたレシピを破り捨てたところで、中身はじいちゃんの頭の中にあるんだから、そんな行動は無意味だ。冷静に考えればね。でも残された命が短いと知った時の心境はどうだったろう。思い余^{おほ}ってそう考えたとしても、無理ないじゃないか。秘密の通路の存在を知っていたことが、ばあちゃんの命運

を分けたんだね」

ランタンの灯が揺らめいた。電池式なのに。

「その昔、じいちゃんが学校から帰るのを、ばあちゃんは、独りこの辺りで待っていたと聞いた。そんな時、ふとしたはずみで秘密の通路を見つけてしまったことは十分考えられる。俳句を詠むぐらい自然への観察眼が鋭かったばあちゃんだ、風景のちよつとした違和感に気づき、発見したとしても不思議がるに当たらない」

オレの科白に力がこもっていくのと対照的に、座り込んだじいちゃんの肩は徐々に落ちていった。ここで同情は禁物だ。これは、ばあちゃんの弔い合戦なのだ！

「ひよつとしたら昔も、蔵に鍵が掛かっていたりしたら、この通路から忍び込むことがあったかもしれない。蔵には秘蔵図書が多くて、ばあちゃんにとっては楽園だったんだから」

若くて志乃に似たばあちゃんが、ペロリと舌を出しながら穴に入っていく、梯子を昇っていく。

「誰にも話さなかったのは、こつそり蔵に侵入した行動を恥じたからかな。でもまさか五十年後にもう一度入ることになるとは想像してなかったろう。体を張って、夫や息子たちを諫めるために」

じいちゃんの首がガクツと折れた。

67 頑なな心

「坊ちゃん、もうその辺で……」

多々良さんの声で、オレはようやく熱に浮かれたように動いていた唇を止めた。

じいちゃんはランタンの光を背に浴びて、まるで石にでもなったように、首を垂れたままピクリとも動かない。言い過ぎたろうか。でも鼻っ柱の強いじいちゃんにはこれぐらい言わないと。

人声が途切れると、部屋はまるで防音室のように静かになった。三人の呼吸する音が聞こえるだけだ。

……じいちゃん、何とか言ってくれよ。

それでも無言は続く。オレは耐えきれなくなつて、じいちゃんの前に膝をついた。

じいちゃんを虐めてるようでツライが、こんなチャンスは二度どないだろう。

「なあ、もう叔父さんたちを許してやったらどうなの。みんなイイ年齢としなんだから、任せてやればいいじゃない。ばあちゃんだってそれを望んでたんじゃないかな。隠居して孫の相手に日がな過ごしたって誰も文句言わないよ」

しかしじいちゃんはオレの言葉を聞いてか聞かずか、すっと立ち上がると、

「……多々良、部屋のどこかにレシピが落ちているかもしれん。念のために調べてくれ」

それだけ言うと、秘密の通路へ降りる梯子に手をかけ、後も見ずに降りていった。

なんだよ、人がせつかく心配して意見してるのに。そんな不満が顔に出ていたんだろう。多々良さんがオレの肩にポンと手を置き、

「旦那様は、あれで結構こた応えておられますよ。反論ひとつしない旦那様なんぞ、これまでに見たことがありませんから」

「そうかなあ」

「ええ。それに坊ちゃんは、誰かが言うべきことを言うてくださったと思います。でも言葉にするのは心苦しかったですでしょう」

「いやあ、そう言ってもらえると報われるな」

「さあ、手伝ってください。旦那様のお言いつけですし、本当にこの部屋に残ってないかどうか、調べてみましょう」

それから一時間ほどかけて念入りに調べてみたものの、レシピは影も形もなかった。

「誰にも言わないで欲しいんですって。レシピが消えたことは」

埃まみれで屋敷に戻ったオレと多々良さんに、お文さんがじいちゃんの伝言を伝えた。

さすがにカツとなつて駆け出しそうになったが、オレの肩を多々良さんがやんわりと押さえた。

「坊ちゃん、焦っちゃいけませんて」

オレは納得がいかなかった。

「だって来週にも会議があるんだろう？ そしたらレシピ部屋の封印が解かれちゃうじゃないか」

「だから」彼は肩においた手に力をこめた。「まだ時間があるということです。旦那様にお時間をおあげなさい」

翌金曜日。まるで通勤気分で志乃はやってきた。オレは昨夜の様子をじっくり話して聞かせた。場合によっては、土曜の計画は立ち消えになる可能性もあったが、じいちゃんの態度に変化が見られないため、決行することでおれたちは一致した。

「コウちゃんは明日の昼には来れるって」

「本当に頼りになるのか？ まだ若いのに」

「ダイジョーブやって。あたしが小判押したる」

「太鼓判だろ」

この日、じいちゃんはオレと顔を合わせるのを避けた。食事を書斎で済ませ、志乃の挨拶にも扉越しに返答した

だけだった。

くそっ、頑固ジジイ。

そして土曜日が来た。いよいよ今日、オレと志乃が作る再現ドラマが幕を切って落とすのだ。

68 決行の日

日付が変わって日曜日、午前0時三十二分。

オレは今、押入の中で、時が満ちるのを息を殺して待っている。緊張に手が汗ばむ。その手の中にはハイビジョンビデオカメラGR—HD1。充電も完璧だし、高感度マイクも取り付けた。

あと数分。あと数分すれば、オレたちの仕込んだ「ズティング」が始動する。うーん、ポール・ニューマン、ロバート・レッドフォード……。

いかん、名画を回想してる場合ではない。

オレは僅かな隙間から押入の外を覗いた。暗い和室の中では、じいちゃんが気持ち良さそうに鼾なげをかいている。

押入に忍び込んだのは午後十時五十分。その十分後、じいちゃんはいつもの通り時間厳守でこの寝室に入り、床につくとすぐに寝入ったようだ。

すでに一時間と四十五分が経過した。首と腰が痛くなってきた。もう少しの辛抱だ。

屋敷の中は森閑としている。雨戸の向こうから時折、風にそよぐ木々の音が聞こえるぐらいだ。

先程まで途切れ途切れだったじいちゃんの鼻が安定してきた。そろそろだ。オレは携帯を開き、志乃に合図のコールを送った。

前日の午後一時。オレは梅田駅前の喫茶店で志乃と落ち合った。彼女の横で馬鹿丁寧に頭を下げる若者こそ、あの日東京駅で志乃との別れに堪えきれず号泣したコウちゃんこと村木功君だ。こうしてすぐにまた再会できるとは夢にも思っていなかったろう。顔が喜びで光り輝いている。

「菊池監督！ お久しぶりでっす！」

あまりの大声に周囲の客が何ごとかと訝しむ。

「おいおい、監督なんてやめてくれよ」

「あら、ええやん。トシが脚本書いて演出するんやから立派な監督さんや」

「ハイ、監督！ よろしくお願いしまっす！」

隣の女性がオレの顔をジロジロと覗き込む。有名人なんか？ といった面持ちで。

「判ったからボリュームを下げてくれ」

午後一時半。ひととおり企画の説明を終えると、昨夜

遅くまでかかって完成した絵コンテを、二人の前に拡げて見せた。

「うーわ、本格的やんか！」

「気合い、入りまっす！」

静かに。

「話したように、今回は映像に収めるのは二の次、あくまでライブが主眼となる。だからお客を前にして、志乃が七十歳の忍ばあちゃんになりきれるかどうか、それが企画の成否を分ける」

「セイヒ？」と志乃。

「成功か失敗かは、志乃にかかってるってこと」

「なんか燃えてくるねー。やるよあたしは」

あれから志乃は発掘フィルムをダビングしたビデオを自宅に持ち帰り、何度も繰り返し観ているという。しかし考えてみれば、志乃がどれほどオリジナルになりきれなのか、オレにとっては未知数だ。あの戦時下の老婦人を演じたのだって、実物の映像と見比べたわけじゃないし。今回は時間がないので、ここまで来たら、志乃の自信たっぷりの言葉を信用するしかない。

オレは村木に数枚の写真を差し出した。

「これが亡くなる直前の忍ばあちゃんだ。やれそうかい？」

村木は細面ほそおもてに乗った大きな目を剥むき出すようにして写

真を見つめていたが、元気よく顔を上げ、

「ハイ、大丈夫でっす！」

「他にビデオも用意した。メイクや着替えをするのに、家の近所にあるホテルの一室を取ったので、そこでやる
といいよ」

村木は目を潤ませて、志乃を見た。

「俺、また姐さんねえのメイクができるなんて夢のよでっす。
精一杯頑張りまっす！」

彼の崇拜ぶりは尋常じゃないな。

69 村木功の話

午前0時三十五分。

あらかじめマナーモードにしておいた携帯から志乃に電話をかけた。もちろん通話などせず、呼び出し音を鳴らしただけ。

いよいよ“ショウタイム”だ。ロバート・デ・ニーロ、エディ・マーフィ……。

午後一時五十五分。綿密な打ち合わせを終えたオレたち三人は喫茶店を後にした。夜まで時間はたっぷりあるが、やるべきことも山ほどある。

電車を乗り継いで家うちの最寄り駅まで来ると、二人を三

周忌の時に利用したホテルへと案内した。

予約した部屋のクローゼットには、今朝、屋敷からこっそり持ち出して受付に預けておいた忍ばあちゃんの衣服が掛けられていた。

「くれぐれも不用意に表に出たりしないでくれよ。特に変装した格好ではね。ここは鷲村の関係者やら知人がよく使うホテルなんだから」

「いやーん、変装なんて言わんとして」

「……なりきったまま、外を歩かないでね」

「ほーい」

村木はそのままヒマラヤにでも登れそうな、大きなリュックを背中から下ろすと、頼りなげな外見に似合わず、てきぱきとした動作で荷物を広げていく。化粧道具やウィッグ、その他オレには用途不明な道具がテーブルの上やらベッドの上に並べられていった。

「村木君は若いのに、かなり手慣れた様子だね」

オレは彼の経験の度合いを知りたくなり、遠回しに訊ねてみた。

「ハイ、小さい頃からお袋の仕事ぶりを見ていたもんですから」

「お母さんも映画関係者なの？」

「ハイ、俺が物心ついた頃から、ずっとメイクの仕事をしてました。だから俺にとって化粧道具は玩具みたいな

ものなんです。よく悪戯いたずらして叱なぐられたものですよ」

「でもこの仕事でやっていこうと思ったのは、お母さん譲りの才能に目覚めたからかな」

「いえ、俺なんてまだまだです。でも俺がお袋の手伝いたまたまをしているところを、レニーさんが偶々見かけて、自分にもやってくれないかと声を掛けてくださったのが大きいですね」

「れにーさん？」

「レニー・ゼルヴィガーさんです。ちょうど『ブリジット・ジョーンズの日記』を撮影中で、小太りだけど可愛らしく見せたいのに上手いかないところぼしておられました。それで少しだけ手伝って見たらスゴく気に入ってくださって」

なんでここに昨年のオスカー受賞者の名前が出てくるんだ？

村木は頭を掻き掻き、話を続ける。

「自慢話になっちゃいますけど『めぐりあう時間たち』のジュリさんもお手伝いさせていただきました。七十を超えた老婆にメイクしてくれて頼まれて。エンドロールにはクレジットされなかったんですが、あの老けメイクはほとんど俺一人でやらせてもらいました」

今度はジュリアン・ムーアの登場かよ。オレは瞬まばたきすらも忘れて彼の話に聞き入っていた。

「でも、ハリウッドの水は俺には合いませんでした。なんだか流れ作業すぎちゃって……。だから『ブリジット2』もお願いねと言ってくれていたレニーさんには悪いけど丁重にお断りして、日本に単身で帰ってきたんです。ところがこの国はこの国ですごく閉鎖的で、俺の入り込む隙間が見つかりませんでした。人見知りする性格も災いしたんでしょうね。そんな時なんです。偶然見た舞台上で姐さんに出会ったのは。天才だと思いました。そう、姐さんには誰も真似できない天賦の才があると感じました。だから俺、姐さんに付いていこうと決心したんです」

彼は自慢の姉を見る眼差しを志乃に注いだ。

70 急な頼み

午前0時三十七分。

携帯が振動した。志乃からの返事メールだ。

『こちら準備オッケー。すぐ降りていきます』。

さあいよいよだ。矢は放たれた。

押入の戸を開け放つ。じいちゃんは相変わらず高軒たかいびきで夢の中だ。オレは畳の上に這い出すと、静かに一つ伸びをして体をほぐした。

十畳ほどの和室は奥行き方向に長く、オレの隠れて

いた押入は廊下とは反対の奥まった側に位置している。そのため、じいちゃんより先に入って隠れておく必要があったのだが、正直疲れた。

しかしそんなことは言ってられない。オレはマイクを左右に二本、畳の上に配置すると、テープレコーダーの録音ボタンを押した。

部屋自体は間接照明灯で薄暗く照らされている。当然、撮影には光量不足だ。かと言って昼間のように明るいライトを用意するわけにもいかない。オレは押入から走馬灯を取り出して、壁のコンセントにプラグを差し込んだ。スイッチの上に指を置くと、オンにするタイミングを待った。

午後二時四十五分。ホテルの一室。

村木から聞かされた途方もない話に、オレは相槌も打てないままポカンとしていた。村木はそんなオレに気づかず淡々との準備を進めている。

彼の語り口には微塵も銜い^{てら}がなかった。自慢話になりますがと断ったものの、自慢を鼻に掛ける様子はこれっぽっちも見られない。ひたすら素直な青年らしい。

「監督、おばあちゃんのビデオを見せてもらえますか？」

「あ、ああ」

オレは見えない呪縛から解き放たれたように、ぎこちなく体を動かすと、持参したビデオテープをテレビの脇に設置されたデッキに差し込んだ。

その時、携帯がズボンのポケットの中でヴヴヴと振動した。取り出して表示を見ると『勘三郎』叔父からだ。

オレは村木に声をかけた。

「悪いけど、再生して見ててくれ」

オレはあわてて部屋を出ると、廊下で電話を受けた。

『よう、俊郎。今日は屋敷じゃないのか』

「うん、ちよつと外出しててね」

『志乃さんといっしょか？』

「今日はひとりだよ」

夜のアリのバイのためにも、志乃が近くにいることを感づかれない方がいい。

『じつは急な頼みなんだが、聞いてくれるか？』

「オレにできることなら」

『俊郎にしかできないことだ。明日の日曜なんだけどな、俺たち兄弟が揃って屋敷に出向くことになった。来週水曜日に役員会があつて、その場で決着をつけると勘次郎兄貴は息巻いてるわけだが、正式な場で親父を追いつめるようなことは、できれば避けたいと勘太郎の兄貴が言い出して、明日の日曜に親子水入らずで最後の話し合いを持とうということになったんだ。勘次郎兄貴は最後まで

で反対していたが、他の三人が無理矢理了解させた。でもな。修羅場は免れないと思う。はつきり言って法要の時みたいな喧嘩を繰り返すだけかもしれない。それでもやらないよりマシ、これ以上悪くなりようがない……そこでだ。俊郎、今、ビデオの編集やつてるよな」

「法要の記録ビデオならだいたい完成したけど」

『よし、それに最近発見されたお袋の映像を加えたスペシャル物を明日までに作つといてほしいんだ。できるだけ場を和ませるような映像がいい』

「えーっ、明日までに？」

『そうだ、頼んだぞ。親父や勘次郎兄貴をホロリとさせるぐらい感動的なシーンをな。金は払う。十万でどうだ？ おまけにハワイの金髪ネエちゃんを紹介するぞ。じゃ頼んだからな』

叔父は言うだけ言うと電話を切ってしまった。

71 中座

午前0時三十九分。

ミシッ。階段の軋^{きし}む音が微^{かす}かに聞こえた。

ゆっくり来いよ。あわてて転けたりするなよ。

オレは心の中で志乃に念を送る。

この部屋は階段から廊下を歩いて三つ目。他には誰も

寝ていない。多々良夫妻の部屋はずっと入口の方だから、まず起きてくる心配はない。

部屋の気温は低いのに、目の中に汗がしたたり落ちてくる。口の中がカラカラに乾いている。なのにこのワクワク感はどうだ。オレは今この瞬間を心から楽しんでいる。

昨日、志乃たちに語ったように、今回のメインは撮影ではない。それでもいい画えを撮りたい気持ちはどうしようもなく込み上げてくる。

やっぱりオレは根っからの映像マンなんだな。

午後二時五十四分。いきなり叔父から明日までの仕事を仰せつかったオレは、頼まれるとイヤと言えない性格に一言毒ついてから部屋に戻った。

村木はカブリつくように、ばあちゃんの映像に見入っていた。横から志乃があれこれとアドバイスしている。

「オレ、今晚は徹夜になりそうだ」

「なんの電話やったん？」志乃が振り向いた。

一通り説明すると、なるほどねー金には代えられへんもんなーと勝手に納得している。

「違うよ。オレの技術が役に立つんなら、どんなことでもしたいじゃないか」

それに十万は大きいしねーとまた言う。確かに魅力的

だが。

「そしたらさ」志乃はオレの両肩に手を置いた。「後はあたしらで準備やつとくから、アンタは屋敷に戻って、ビデオの編集をやつとつたら？」

「でも、ばあちゃんを生で知^{ナマ}ってるオレがチェックしない」と

「そやから、夕方にまた来てくれたらええやん」

一理ある。時間は有効に使いたい。

「じゃあ、そうさせてもらおうかな。今からだと六時か七時には来れると思う」

「ラジャー」

「村木君」

オレが呼びかけると、彼は律儀に立ち上がってこちらに体を向けた。

「悪いけど中座させてもらうよ。また後で」

「判りました。行つてらっしゃいませ」

そう言うのと深々とお辞儀した。アメリカ育ちなのに、なんでこんなに礼儀正しいんだろう？

午後三時二十五分。屋敷に帰ってきたオレは、急いで蔵のフィルムをビデオに変換する作業に取りかかった。DPEに発注する時間がないので、スクリーンに映した映像を直接ビデオに撮影する。面倒くさいがしかたがな

い。

めばしいシーンを撮り終えて、蔵を出る頃には陽が暮れていた。携帯の時計表示を見ると午後六時十二分。くたびれた。こんなん深夜の作戦決行まで起きてられるだろうか。その上、後に待ってるビデオ編集まで体がもつかな。昨夜のシナリオ作成で寝不足の身にはキツイぜ。自室の机の上にビデオテープをどさりと置き、ベッドに倒れ込んで思いつき背筋を伸ばした。さて志乃たちの待つホテルに戻るとするか……。

午後九時四十三分。なぜだーーーーー。

ナゼオレハ眠ッテシマッタ？

携帯の留守電には、志乃の声が山盛り入っていた。はじめの方は脳天気な声だが、後になるにしたがい、心配げな声色に変わっている。マナーモードのまま机の上に放り出したオレのミスだ。

電話すると、待ちかねたという声が聞こえた。

「どないしたん。ホテルから動かれへんやーん」

「本当にスマン！ 急いで迎えに行くから待ってくれ！」

ジャケットを掴むと全速力で階段を駆け下りた。
玄関で危うくお文さんとぶつかりそうになった。

「あれ坊ちゃん、いらっしやったんですか。声がしない
ものだから外出されたとばかり……」

「ちよつと自転車借りるね」

「お風呂が沸いてますよ。それからご夕食も」

「あとで」

慌てているから、靴の紐がうまく結べない。

「こんな時間にどちらへお出かけですか？」

「……駅前までね。ビデオテープが切れたんだ」

何とかごまかして玄関を飛び出した。ガレージに駆け
込み、お文さん愛用の“ママチャリ”に跨ると、夜の坂
道を滑り降りていった。

午後十時十分。オレは息せき切って、ホテルの部屋に
飛び込んだ。

「済まない！ 遅刻しちまって……」

そこから先の言葉が出てこなかった。

部屋の中央に佇んで、オレを迎え入れた人物がいる
……懐かしいばあちゃんその人だ！

和服を着て帯の前で手を合わせ、にこりと微笑むその
顔は、紛れもない、三年前に他界したばあちゃんだ！

「あ、あの、オレ……」

するとばあちゃんはクククと笑い出した。
しまった、そうだった。

「志乃！」

「おかえりやつしやー。どない？ あたし、なりき
れとる？ なりきれとるー？ アハハ」

ばあちゃんが、七十歳のばあちゃんが、白髪のばあ
ちゃんが、小躍りしてる。

違う、ばあちゃんはそんな踊ったりしない！

「コラ、志乃！」

「んーなんだね？ 俊郎」

うぐぐ。声が出ない。ホンモノじゃないと判っていて
も、この気持ちというか圧力というか感触というか、何
なんだ！

よく見ると、目尻や首筋の皺しわ、少し荒れた肌まで、ば
あちゃんの特徴を見事に再現している。

「すごいな……そっくりだよ」

「やろ？ コウちゃんおいでー」

呼ばれて部屋の隅に控えていた村木がおずおずと前に
出てきた。

「いかがでしょう……か？」

あくまで遠慮がちに訊ねてくる。

「いやあスゴいよ村木君。オレ本当にはあちゃんが生き
返ったのかと思ったよ。まさにアカデミーメイクアップ

賞モノだね」

オレが絶賛すると、村木は含羞^{はにか}んだ顔を真っ赤にして、ありがとうございますと頭を下げた。

「いや本当にオレは村木君を見直した。もちろん志乃のなりきり演技も素晴らしいけど、これほど完璧に再現できるとは予想してなかったよ」

オレは拍手までしてしまった。するとさすがに怪しいと思ったのか、志乃のばあちゃんが眉間に皺を寄せて、オレの顔を覗き込む。

「なんか変にホメすぎてへん？」

「どうしてよ、オレ心底、感動してるんだから」
額から汗がにじみ出す。

「なあ、なんで夕方に来えへんかったん？ わたしら部屋から出られへんし、腹ぺこで待ってたんやで」

「……ごめんなさい、寝てました！」

我慢できずオレは正直に告白してしまった。

すると志乃は大きく目を見開くと、ナニーと怒鳴つて、オレの腰を掴んでベッドに引き据え、

「そんないい加減な子に育てた覚えはありませんよ。世間様に顔向けでけへんわ。ばあちゃんがお尻をぶってあげます。さあズボンを脱ぎなさい」

「わわわ、やめてくれ！ 謝るから、許してくれ。」

おい、村木君、笑ってないで助けてくれって。こら、ベ

ルトを外すな！　ばあちゃんはそんなことしないぞ！」

73 スタート

午後十時三十五分。鷺村邸の裏。

じいちゃんは毎晩決まって十一時に就寝する。オレたちの計画はその寝室が実行現場であり、舞台となる。一度きりのライブ。失敗すれば後はない。計画の主たる目的は……言うまでもない。

さてオレが不覚にもうたた寝で遅刻したため、ホテルに到着したのは十一時まであと五十分というギリギリの時間だった。まことにヤバイ状況だったが、志乃たちはいつでも出発できるよう荷造りを終えてくれていたので助かった。腹が減ったと言っていたが、こちらもじつはルームサービスで夕食を終えていたという。返す返すも申し訳なく、頭の上がないオレだった。

オレ、志乃、村木の三人は、ホテル前からタクシーに乗り込み、屋敷へと夜の道を急いだ。一刻の猶予もないので車内で手短に打ち合わせを行った。志乃は和装で老けメイクのまま普段どおりに喋るので、運転手の不審を大いに買ったようだが、ホテルから屋敷までは五分ほどの距離、話しかけられる前に到着した。

表玄関から堂々と入ることはできない。オレたちは屋

敷の裏手でタクシーを降り、畦道あぜみちを通って蔵の脇の築地塀の前までやってきた。

うちのような屋敷ならセキュリティを掛けていたりするものだが、幸いじいちゃんがそんなモンいらんという人物なので、オレたちは低い塀を乗り越えて楽々侵入することができた。

午後十時四十二分。もう時間がない。

数本の庭園灯に照らされただけの暗い庭を一散に駆ける。ところが志乃は突然足を止めると、手を合わせて座り込んだ。

「ホンマはばあちゃんのお墓にお参りしてから来たかったんやけどなあ」

そう呟つぶやきながら、ばあちゃんが倒れていたあたりに向かって拝んだ。村木もそれに倣ならう。

何を悠長な、お参りなら終わってからいくらでもやるからと、オレは自分の寝坊を棚に上げ、志乃の腕を掴つかんで無理矢理立たせた。

二人を勝手口に誘導し、オレは玄関に飛び込んで内側から勝手口を開け、二人を引き入れた。お文さんらにくわしたら一巻の終わりだったが、これも幸い、台所はしんとしていた。

そのまま二人を二階のオレの部屋へと案内する。

「あとは手筈てはず通りに頼んだぞ」

とだけ言って、オレはビデオカメラやレコーダーを突っ込んだリュックを背負うと、ピースサインの二人に見送られて、静かに部屋を出た。

午前0時四十分。今。

廊下を足音が近づいてくる。ゆったりとした足取りで。逆にオレの心臓は早鐘のように鳴り続けている。振動にカメラがブレないかと心配になるほどだ。

足音が部屋のすぐ外で止まった。

一拍の間をおいて障子がすーっと開いた。志乃はわざわざ廊下に膝をついていた。じいちゃんは眠ってるんだから、わざわざそこまですることはない。シナリオにも書いていないし。

その時オレの頭に何年も前の記憶が蘇^{よみがえ}った。確かに忍ばあちゃんは、じいちゃんの居る部屋に入るときは必ずそうしていたのだ。

オレが忘れていたぐらいなのに、どうして志乃は知ってるんだ？ フィルムにもそんなシーンは無かったはずだ……。

志乃はひとつお辞儀をすると室内に入ってきた。彼女の姿が仄暗い走馬灯に照らされて、ファインダーの中でおぼろげに浮かび上がる。

そこには間違いなくばあちゃんがいた。

ホテルで見せられた立ち居振る舞いとはまるつきり次元が違う。曲がった腰の角度まで生き写し。まるで赤ちゃんが憑依ひょういしたかのように、今の志乃からは志乃が消えていた。

“なりきる”とはこういうことか。

74 忍・降臨

“志乃は赤ちゃん”は部屋に入ると、廊下にいた時と同じ動作で膝をつき、障子を閉めた。立ち上がる瞬間、腰を上げるのが辛いつらというように、一瞬表情が曇ったが、すぐに消えた。

そうだ。忍は赤ちゃんは凜とした人だった。辛いときも、悲しいときも。

鷺村製菓の社長夫人として人前に出ることの多かった半生。ばあちゃんは常ににこやかに、かつ毅然とした態度で周囲の人々と接してきた。内にいては良き妻良き母として。病を得てからもそれは変わらなかった。裏では人知れず苦労も多かったろう。だが、ばあちゃんを知る人の話にも、現存するフィルムの中にも、そんな様子は皆無だ。時折苦しそうに心臓のあたりを押さえたり、階段の途中で大儀そうに息をつく以外は……。

「あなた」

眠るじいちゃんの枕元に正座した志乃はあちゃんは、左手を伸ばすと布団の上からじいちゃんの体を揺すった。しまった。起こす役はオレだった。元より役者の片割れが眠っているのはドラマにも何なりはしない。オレの書いたシナリオだって、オレが脇から手を伸ばしてじいちゃんを揺り起こすところからスタートしているのだ。しかし……。

レンズの向こう側では既に“物語”は始まっていた。先から幕が上がっている。オレの入り込む余地はない。現に志乃だって、さっきからオレに一度も視線を寄越したりしてないじゃないか。

「あなた」

二度目の呼びかけに、ようやくじいちゃんは目を開いた。と同時にオレは走馬灯の第二スイッチを入れた。走馬灯の外筒が静かに回転を始め、そこに描かれた淡い色彩が鈍い光によって四囲の壁に投影され動き出した。桃色、緑、青などさまざまな光が寝室をまるで別世界に塗り替える。

「誰だ……？」

「あなた、私ですよ」

「……忍、忍か？」

どうやら目覚めてくれたようだ。しかし本格的に覚醒されては困る。夢見心地のままできてくれなくては。目

の前にいるのが亡き妻だと認めてくれれば、これは……。
「これは夢なのか？」

そう、それでいい。

志乃ばあちゃんは、泳ぐような挙措で畳に両手を着くと、

「あなた、ご無沙汰しておりました。お元気そうで、忍も安心しました」

声まではあちゃんそっくりだ。顔が似ていると声まで似るとはよく聞か、志乃のなりきり技術は声も含めたトータルなものなのだろう。流石だ。さすが

突然じいちゃんがむっくりと起きあがった。布団の上に座り直すと両手を前につき、ばあちゃんに向かって深々と頭を垂れた。こうべ

「すまん忍！ 許してくれ、わしが悪かった！」

驚いたオレは危うくカメラを落としそうになり、あわててグリップを握り直した。

オレの書いたシナリオでは、目覚めたじいちゃんがどんな反応を示すかは書かれていない。予測しにくい人だから当然といえば当然だが。

シナリオには志乃が口にすべき最低限の台詞しか書かなかった。後はその場のアドリブだ。

志乃は舞台女優の卵だった。舞台では時たま不測の事態が発生する。彼女にはその経験を大いに活かして、何

が起きても切り抜けてほしい。

オレの身勝手な願望ではある。手抜き監督の誹りを受^{そし}けても仕方ないな。

じいちゃんが首を上げた。志乃はあちゃんの顔色を伺^{うかが}っているらしい。オレは音を立てないように注意しながら、二人の表情が撮れる位置まで体を動かした。

志乃は小首を傾げただけで、じいちゃんの視線を正面から受け止めると、かすかに微笑んだ。

75 真相

じいちゃんは志乃はあちゃんの投げかけた微笑みに縫^{すが}るように膝を前に寄せた。あるいは最愛の妻に今一度触れてみたいと思ったのかもしれない。

しかしいち早く察した志乃は、煙がゆらぐような動作でふわりと立ち上がった。自分はこの世のものではないことを顕示するかのごとく。

「許すって、何をですか？」

志乃は問を發した。

「何をつて……そりゃ……」

じいちゃんは言葉に詰まって、口をモグモグさせながら目を落とす。

いいぞ、その調子だ志乃。

昨日の打ち合わせの時、村木が一つだけ演技に注文をつけた。

『決して相手の間近に顔を寄せないように』。

裏返せば、じいちゃんに間合いを詰められないようにということ。志乃が距離をとったのは正解なのだ。村木によれば、特殊メイクといえど完璧ではない。志乃がどれほどばあちゃんにそっくりだとしても、四十も上の人間に化けるのだ。身内の人間を騙すのは絶対に不可能だだまという。まあ当然だろう。

オレは何本かのハリウッド映画を思い出した。前評判で特殊メイクの出来の良さが絶賛されていたのに、観に行つてがっかりしたことが幾度もある。「それは無理だろう」と苦笑したことも。世界のハリウッドだ。興醒めきようぎするようなものは勘弁してほしい。

ファインダーの中で、じいちゃんが苦しそうに言葉を吐いた。

「わしらが……わしと子供らが諍いさかう姿に、おまえが胸を痛めておつたと」

じいちゃんは顔を上げると、目を剥むかんばかりに志乃を凝視した。

「教えてくれ。レシピを持ち出したのはお前なのか？」
志乃の顔の上を走馬灯の光が乱舞する。演出したオレが言うのも何だが、この世のものとも思えない光景だ。

「はい。私が持ち出しました。今思えば浅はかな考えでしたが」

「それで……レシピをどうした？　本当に飲み込んでしまったのか？」

「お恥ずかしい。聞かないでくださいな」

志乃は袖で顔を隠した。その様子に感極まったのか、じいちゃんの頬をつーつと涙が伝った。

オレも目頭も熱くなった。まさに長年連れ添った夫婦相和すの図。いい画だ……。

「忍、わしゃどうすればいいんじやろう」

両手で顔を覆ったじいちゃんは、半泣きの声で志乃ばあちゃんに問いかけた。

「なあ、わしはこの先どうすれば……」

「あるじゃありませんか、あなたにしかできないことが」

志乃はそう答えながら、一歩前に出た。

「こだわりを捨て、これまでの経緯^{いきさつ}を忘れて、全部白紙に戻すのです。そして息子たちを信頼し、任せておあげなさい。あなたはあなたでこれまで通り“天使のプディング”をお作りになればよろしいのですよ」

遂に出た。いわば決めゼリフ。これにじいちゃんがウンと頷^{うなず}けば終演だ。舞台に幕が下りる。

「ダメじゃ」

ナニ？ この期に及んでまだ言うか。

「ダメなんじゃよ、忍う」

「どうしてですか？」

あくまで志乃はマイペースで訊ねる。

「あの頃、わしはヨーロッパを視察して回ったのはお前も覚えておろう」

「はい、三ヶ月ほど行かれましたね」

「そ、そうじゃ。あれほど長いこと家を空けたことはなかった。……そのせいで、わしは作り方をすっかり忘れてしまったんじゃよ！」